

目次

1. はじめに
2. 異界と物語形式の関係
 - 2.1. 「異界」という表象
 - 2.2. 物語形式と異界
 - 2.2.1. 民話に登場する異界
 - 2.2.2. アンデルセン作品に登場する異界
 - 2.2.3. 現代作品に登場する異界
3. 作品分析
 - 3.1. “Kong Lindorm ”
 - 3.1.1. 作品考察
 - 3.1.2. “Kong Lindorm” の異界
 - 3.2. “Den Lille Havfrue”
 - 3.2.1. 作品考察
 - 3.2.2. “Den Lille Havfrue” の異界
 - 3.3. “Skifting”
 - 3.1.1. 作品考察
 - 3.1.2. “Skifting” の異界
4. 異界に見られる変化
 - 4.1. 異界との対峙
 - 4.2. 異界が語られる構造
5. おわりに

要旨

民話から現代の文学作品にいたるまで、現実とは異なる世界を描いた作品は数多く存在する。本稿では、そんな「異界」について、物語の中で果たす役割という点に着目して分析する。創作された時代の異なる三作品の分析を通して、異界の描き方や役割に変化がみられる部分、見られない部分を明らかにする。なお、分析対象とする三作品は、日常と異界の差異が対比的に表現されている箇所を焦点を当てることを考察の主眼におくため、日常と異界、両方の世界の往来が物語の中心となるものを選出した。

第二章では、はじめに異界という言葉の定義を明らかにし、主にファンタジー文学研究分野で使用される「異界」の語義を前提として論を進めることを示した。このことを踏まえ、各物語形式で登場する異界についても紹介する。続いて、本稿で扱う *folkeeventyr* (民の物語) と *kunsteventyr* (創作物語) の特徴を示した。

folkeeventyr の特徴からは、一人一人の個人ではなく、共同体の持つ意識が表現されていることが読み取れる。また、“*hjemme – ude – hjem*” (共同体—異界—新共同体) というモデルでは、異界は乗り越えるべき困難の存在する外界として描かれる。一方で、*kunsteventyr* の作品としては、まず H.C.Andersen (ハンス・クリスチャン・アンデルセン) (1805-1875) の創作童話を紹介する。*kunsteventyr* は作者が明確な文学作品で、作品ごとに独自の解釈や描写を盛り込むという特徴がある。アンデルセンは、民話の世界観を土台に、子供が楽しめることを重視した童話を創作した。彼が異界を子供が楽しめる物語の舞台として描いたこと、また、アンデルセン作品の異界には死後の世界という側面が見られることを説明した。同じく *kunsteventyr* の例として、異界を扱った現代作品も紹介した。「現代的なテーマを中心に置きながらも民話を下敷きにする」という、アンデルセンの創作童話と近い描き方がなされている点も考慮し、「取り替え子」“*Skifting*” (Charlotte Weitze, 1996) を取り上げた。

第三章で各作品の分析を行う。まず、北欧の民話「リンドオルム王」“*Kong Lindorm*”では、民話のモデルに忠実な形で異界が登場する。また、*folkeeventyr* の特徴通りに、固有名詞が登場せず、共同

体全体に焦点が当たった語り方がされている。異界は人間社会に対する自然として登場し、ここには二項対立の世界観が表れている。更に、「共同体—異界—新共同体」のモデルを用いて「登場人物が困難を乗り越える場所」「大人になるための通過儀礼」としての異界の役割が表れていることを説明した。「人魚姫」“Den Lille Havfrue”(1837)では、主人公の性格や意思決定の様子など、個に視点の当たった描写が増していることを指摘した。異界は「共同体—異界—新共同体」のモデルに比較的忠実な形で登場するものの、ロマン主義の思想やキリスト教的価値観といった、時代背景を反映した世界観が展開されている。「取り替え子」には個人の描写のさらなる増加がみられる。自然と人間社会の対比は同様に描かれるものの、それらが様々な背景を持つ登場人物の視点を通して提示されている。また、物語の核となっているのが主人公のアイデンティティの問題であり、主人公ははじめに属する共同体が曖昧である。そのため、「共同体—異界—新共同体」のモデルが当てはまらない点を指摘した。

第四章では、第三章で挙げた各作品の異界を比較した。まず、異界に対峙する人物に違いがみられる。folkeeventyr では共同体全体から見た異界が描かれるのに対し、kunsteventyr では個人が異界と対峙する。次に、folkeeventyr では異界と共同体、つまり自然と人間社会の対比構造の間に入るものがなかったが、「人魚姫」ではキリスト教的価値観が、「取り替え子」では個人主義の考え方が媒介の役割を果たしていることを説明した。最後に、三作品を時代順に並べてみると「共同体—異界—新共同体」のモデルがだんだんと崩れてきていることを説明した。

第五章では、これまでの章を踏まえてまとめをおこなった。異界の描き方、役割には三作品に共通な点もみられることをはじめに示した。自然と人間社会を対比する表現はどの作品にも存在する。また、異界が登場人物を成長させるという通過儀礼の役割を果たしている部分も、同様にみられる。これらの共通点にも相違点にもいえることとして、異界は日常と比較して相対的に定義される世界である、という点を指摘した。各々が異界、すなわち「自分にとっての日常とは違う」と感じる世界に思いを巡らすことが、自分にとっての日常を知ることにも繋がるだろうと結論付けた。